
DragoonMusket**第一部**"少女に流れる血の証し"

Valk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dragon Musketeer第一部”少女に流れる血の証し”

【Nコード】

N8660Q

【作者名】

Valk

【あらすじ】

誰にも知られない過去を持つ、屈強なる傭兵イザークが負った新たな任務は、没落貴族の一人娘であるエーファ嬢を、極悪非道の貴族であるユング候の魔の手から護ることであった。正反対の性格を持つ四人は、時には仲間割れを起こしながらも、ユング候の放つ追っ手から逃れ続けるが……。

傭兵と少女（前書き）

一部グロテスクな表現が御座います。ご了承ください。

傭兵と少女

「大したもんは入っていませんよ、いやあ」

北部ドイツ出身なのだろうか。瘦身の商人は喉の奥で”r”を発音しながら、欧州にいる多くの行商人のように、手いっぱい金貨を兵士の手につかませた。

「ウル”ル”ステイヒ産の小麦ばかりですよ。小麦をとにかく買って、戦地で売るわけです」

その小男の兵士は一瞬目を丸めていたが、やがてちゃらんちゃらんと、革籠手の中にある金貨を下品に揺らして、その豊かだが乾いた音を確かめた。苦労が多いのか皺の多い面長の顔には、すぐに喜色が浮かぶ。口がゆるみ、目尻が浮いた。その金貨を懐に納めると、小男は思わず、商人と同じような北部訛りの声をうわずらせた。

「同郷のお方、儲かってますな」

「おかげさまですよ」

丁寧で、親近感のある言葉遣いである。その兵士が強欲な兵士ではないことに、商人は小さく、安堵の鼻息を漏らしたのだった。

その商人は、せいぜい五百人規模といった中規模の町と、北部欧州へと続く広い街道を結ぶ関所で、兵士二人による検問を受けていた。町は簡素な木の外壁で囲われていて、その関所と、正反対の方向にある東向きの関所しか、町から外へと出られないらしい。

小男は相変わらず大金に目を輝かせながら、商人に向かってだみ声を発し、

「どうです、やはりコツが？」

「コツはまあ、いろいろ、ですよ。今はとにかく、余計なものを積まずに、食料を積みめば売れます。戦争が起きていますから」

その小男は、なるほど、と頷く。

「兵士は大飯喰らいだから、売れる売れる」

商人は息を継ぐと、「二人分ですよ」と小男に小さく囁いた。小

男は”Ja, Klar!”(当たり前じゃないか!)”と返答しつつも、残念そうに、眉の端を落とし振り向き、そのことを関所をふさぐ大柄の兵士に向かって身振り手振りで教える。

”あわよくば、と思ったんだがなあ”という小声が商人の耳に入ったが、彼は聞かなかったことにする。大柄の兵士は喜びに顔を輝かせている。遠目にも判る喜びようだ。

商人はその大げさに、思わずふつと笑いを漏らした。

やがて僅かな沈黙が訪れた。何となく気まづくなつた小男は、目を商人の馬車にやった。そして、ふと疑問の声を漏らした。

「しかし、なぜレ”ル”又の河川路を使わないのです？ そちらの方が安全でしょう」

心底、不思議そうな顔をしている。

というのも、十七世紀に限らず、中近世の陸路というのは、盗賊が蔓延り極めて危険である。当然行商人が陸路を行こうとすれば、大概は襲われ、良くて身ぐるみ剥がされるか、悪いときには殺される可能性だってあるのだ。

商人は狼狽えの表情を見せず、しかしながら少しの無言の後に、「河川路を使うと、少し尊大の過ぎる役人たちが、金をしょっぴいていく。税だとかの形だね。それがいやなのですよ」

如何にも不満げな表情で、そう言った。それから彼は息を継いで、「それで腕の立つ戦士を雇って ああ、今も馬車の中にいますが

陸路を行こう、と」
「成る程」

兵士は納得の表情である。それからこの小男は息を潜めると、「この関所にも、やたらと正義面をする、嫌みな役人が一人派遣されてきているんですよ」

兵士が、今度は眉をひそめながら、関所の方をわずかの間睨みつけた。

「今は関所の中の控え所にいますがね。では、そろそろ……?」

商人はもう六枚、兵士に金貨の賄賂を渡した。兵士は思わず、小

さく頭を下げる。

「こんなところでいいですか？」

「勿論ですよ。手荷物でも検査をしようと思いましたが、あなたのことです」

小男は、賄賂のこともあってか、商人を早く関所に通したがっていた。ちらちらと、関所の方を見ながら、彼は続ける。

「妙なものは入っていないでしょう」

中近世の関所の警備というのは、みながみな賄賂に弱かったのだ。だが、どこの家も、家計が苦しいのだ。賄賂には、多くの者が、たとえばこの兵士のように善良な小男でさえも、負けざるを得なかったのだ。

それに加え、あの大金である。

金貨というのは無論、庶民の手に安易に渡るようなものではない。

「それでは、ありがとうございます。お達者で、同郷のお方」

兵士と親しげに別れの握手を交わして、その男は馬車に乗った。

安堵の息を口端からもらしている。どうやら荷馬車の中に、何か”妙なもの”を隠していたらしい。兵士たちはその安堵の息を確かに見の逃さなかったが、やはり、それを証拠にどうこうと調べることはしない。

ところが。

馬車が関所の門を通りきろうとしたところである。しゃがれた怒鳴り声が、馬二匹に連れられた、男の大きな荷馬車を止めた。

「そのッ！ 止まれっ！」

怒鳴り声が発せられたのとほぼ同時に、先ほどの二人の兵士たちが、あわてて荷馬車の前方をふさぐ。男は思わずその細い目を開いた。彼は眉をしかめそうになったのを、慌てて八の字に丸める。

何故だ？

男はつぶやいた。彼は疑心を目に浮かべて、兵士たちを見る。先ほどの小男は、如何にも申し訳なさそうに、唇を嚙んでいた。

「役人ですよ。ユング候から派遣されてきた」

彼は肩をすくめる。そして、どうしようもない、とでも言うように首を振り、

「嫌みな野郎だが、逆らえないんだ」

「お役人様ですか。そりゃあ……ちよいとまずいな。なんとかありませんかね」

役人に聞こえないようなささやき声で、馬車に乗った商人が問うたが、兵士たちは顔を横に振るばかりである。商人は舌打ちしたものの、すぐに深呼吸。荷馬車の御者席を降りる。

「全て見ていたぞ、悪徳商人め！ 貴様、賄賂で兵士をたぶらかさうと思つても、私はそうはいかんぞ！」

その役人は、高級に見える革靴をけたたましく踏みながら、商人に怒濤の勢いで歩いていった。商人はその勢いに押され、思わず後ずさりをしてしまったが、人当たりの良い笑顔は浮かべたまま、役人に弁解する。

「すみませんね。私はただ、早めに通りたかつたんですよ」

商人は息を継いだ。怒鳴られていても、その笑顔は変わらない。

「最近盗賊も増えてきて……夕暮れの近いときに町の外に延々といると、必ずといって良いほど襲われますからね」

「ふん。盗賊が怖いのなら、陸路を使う訳がないだろう。どうせ、いかがわしいものでも入っているんじゃないのか？」

一方役人は、赤ら顔で商人を睨みつけている。商人はいらだっていたが、そんなことは露も見せず、それでしたら、と商人は言葉を継いだ。

「どうぞごらんになって、私の潔白さを証明いただければ、幸いです。小麦しかございませんよ。ほかには何も」

「ふん……。おい、この荷馬車の中身をよく調べる。よおくだぞ！」

鼻息荒く役人は、意味もなく怒鳴り声をあげた。小男と大柄の兵士二人は馬車の操作台へと嫌々ながら乗り移って、布で遮られた入り口から、荷馬車の中をかいま見た。

あるのは、商人の言っていた通り、小麦の入った麻の袋だけである。その小麦の袋が、殆ど足場がないほどに、馬車いっぱいに積まれている。小男は思わず、早く通せばよかった、と呟いた。

「小麦しかありませんよ」

面倒くさそうに、馬車の入り口から顔を出して彼は言ったが、それでも役人は、青筋を立てながら、

「馬鹿者！　しっかり中まで見る！　全く、これだから地方の人間は……」

兵士たちは確かな苛立ちを目に浮かべながら、その役人を一瞥したが、役人が二の口を開こうとすると、すぐに馬車の中へと入っていった。

袋、袋、袋……。

全く、あの役人はどうして、ここまで疑り深いのだろうか。何なら、自分で見れば良いのに。

小男はそう思いながら、ふと、袋の隙間に何やら白いものが見えて、念のためにと、積み上げられた袋の城を崩し始めた。一つ、二つ、三つと放り投げてゆく。

四つ目　。四つ目の袋を放りなげて、兵士の動作は止まった。

眉が驚きで大きく上がり、口は半開き。そして彼の目は、一点を見据えて、見開かれていた。

「ひっ！」

可愛らしい悲鳴。埃で汚れていたが、ミルクのような白く滑らかな短髪。ほっそりと卵形の顔。鼻は小さく、か弱げだ。目は幻想的に赤く、手は折れてしまいそうなほどに、線が細い。年齢はまだ二十も満たしていないだろう。とても、若い。

美しい少女が、そこにはいた。

兵士は思わず息をのむ。しかし美しさからではない。そこにいたのは、いてはならない筈の人間なのである。

「あ、あ、あ……」

「ん？　どうした？」

もつ片方の兵士が、袋だらけの足場でふらつきながら、彼に歩み寄る。長身であるためか、窮屈そうだ。

ところが、兵士は窮屈なことも忘れて、驚きで背を伸ばした。天井に、平らな頭がつく。そして彼は、小男と同じように、目を見開いた。

「こ、こいつ……ローゼンタ

銃声。

兵士の声を遮るように、銃声が鳴り響く。それと同時に、兵士の首筋に、何か冷たいものが当たった。

ドオン。

銃声が鳴り響き、鮮血が大きく宙に翻った。先ほどまで偉そうに怒鳴り声を上げていた役人は、悲鳴を上げるまもなく、恐怖と苦痛に顔を歪ませて、地に伏している。

衝撃と銃声で遠くなった役人の耳には、ただ二つの音だけが聞こえている。どくどく、と脈を打つ死に際の心臓の音と、とんとんと土を蹴って役人に歩み寄る、商人の死の足音。

「お前がおとなしけりゃ、死なずに済んだんだぞ」

遠くに聞こえる、感情のこもっていない無機質な商人の声に、役人はがたがたとその丸顔を震わせながら、声の主へと顔を上げ、目で追った。つい前まで浮かべていた人のよい顔とは全く違うものがそこにはあった。

不機嫌そうなかめ面、険のある目に鋭い眼光。その男の鷲鼻は攻撃的にとんがっている。

こんなの、先ほどまで居たはずの、人当たりのよい商人の顔では決してない。むしろ、まるで歴戦の暗殺者のような顔だ。何故自分は、こんな人間を、ただの権力に弱い商人と勘違いしていたのだろう。

不明瞭な頭でそう思いながら、役人の意識は、白濁したもやの中へと、少しずつ飲み込まれていったのだった。

役人へと弾を放った小型の火縄銃の持ち主、イザーク・シュヴァルツは、ゆっくりと役人の身体へと歩み寄り、しゃがみこむと、その無礼な人間の脈がないことを確認した。確認してすぐに彼は立ち上がり、火縄銃に弾丸を込めながら、今度は関所の控え所へと向かう。足取りに焦りは見られず、息にも乱れはない。まるで熟練の暗殺者のような振る舞いのまま、彼は静かに、気配を消して控え所扉の小さな隙間から、中の様子を確認する。

控え小屋には、二人ほどの兵士がいた。銃声があったというのに、獵師の銃が放たれただけと思っただのだろうか、二人はのんきに、サイコロを使ったゲームに熱中している。

思わぬ僥倖に眼を細めたイザークはまず、小屋の木扉をゆっくりと開けると、一発の弾丸を込めた火縄銃を、迷いなく兵士の巨体へと照準、射撃。呆気にとられた片方の兵士には、すぐに投げナイフが弾き飛ばされる。ごとりと、と粗末なオークのテーブルが、二つ分の大きな音を立てた。その時間は、僅か三十秒にも満たない。全く躊躇がなく、残虐で、外道な殺人を、その男はものの三十秒で、やり遂げたのだ。

イザークは戦闘不能になった兵士たちにとどめを刺すと、行きと同じく緩慢な動作で、馬車へと戻っていった。

彼が馬車へと戻ると、そこには二人の人影と、三つの死体があった。死体は先ほどの役人と、小男、そして大柄な兵士である。

イザークはそこでようやく緊張をゆるめて、ふうっ、と小さく、鼻息を漏らす。町境を守る小さな関所の兵士たちは、これで全滅した。

「全員だな」

イザークは、馬車の周りで弓を構えた、二人の人影にそう問いかけた。一人の影がうなずき、もう一人の者が口を開く。

「では、すぐに行きましょう。出きるだけ、足跡をつかまletakは

ない」

「ごもつともだ」

イザークはきわめて無機質な表情で、そう呟いたのだった。

馬車の中は、きわめて静かだった。

関所を通る前までは、積まれた袋でお互いの顔こそは見えないものの、不安を紛らわす程度には、軽い会話を続けていた。だが今は、馬車の中は全くの沈黙に包まれている。

白髪の少女は、その髪と同じ色をした白い眉を、悲しげに歪ませていた。赤いたれ目はその眉に相まって、余計に憂色を滲ませている。年相応の小さな耳には、兵士たちの鈍い悲鳴が、まだ残っていた。

腰にかけた毛布を、ぎゅうと握る。

殺人が許されないと伝える状況にないことは、もちろん知っている。ロートシュヴァルト兄妹と、傭兵のイザーク・シュヴァルツが人を殺めているのは、自分のためだとも知っている。

彼女はそれでも、自分の見知った者が、将来のある見ず知らずの人間を殺すことに、哀しみを帯びた一種の反感を覚えていたのだった。

「……………」

彼女は口を真一文字に結んでいる。言いたい言葉はすでに、喉まで出かかっていた。だが決して、何もしていない自分が言って良いことでは、無いのだ。

聡明な娘である、エーファ・ヴァイス・バロンフォン・ローゼンタールは、そのことを知っているだけに、余計な悲しみを覚えざるを得なかった。

その悲しみを知ってか知らずか、沈黙のままに、馬車は延々と揺れ続ける。夕方までには町に着くらしいが、エーファは気が遠くな

りそうであった。

彼女は窮屈な袋の城の中で、どうにか身体を横にする。そして肩をすくませながら、小さく心細げなため息を吐いたのだった。

元はと言えば、自分がいけないのだ。自分が、父であるローゼンタール男爵の疑心暗鬼を取り除きさえ出来れば、あるいは宗教戦争でも生き残れたのかもしれないのだ。

エーファは重くなってゆく瞼を閉じ、まどろむ意識の中で、昔のことを思案していた。つい数ヶ月前の昔だ。

疑心暗鬼に陥った父と、疑心暗鬼による粛正で、着々と数を減らしてゆく家臣たち。宮殿の廊下にいた使用人は、疑心暗鬼の父のことを、いつものようにこんな噂話をしていた。

悪魔に取り付かれたのだ、と。

「違う、違うのです！ 父はただ……ただ、心の病気になっただけなのです！」

エーファが悲痛な叫び声をあげると、被りもののような狼の頭を横に振りながら、使用人の男は、目を泳がせながら、眉を上げつつも口を開いた。

「エーファ様、お言葉ですが、何を仰っているのですか？ 我々はただ、仕事の話をしていただけなのですが……」

そう言われると、エーファは黙りこくるしかなかった。けれどただ首を振って、目には大粒の涙を溜めながら、違う、違うと呟きつづける。

「何が違うと言うのだ？ ん？ 言っでごらん、可愛い我が娘よ」
老いによる白い髭を、顎いっぱいたたえながら、ローゼンタール男爵はエーファの頭を抱き寄せて、白い髪の毛を優しく撫でた。暖かな温もりが、エーファを包み込む。見上げると、そこには笑顔の羊の顔があった。

「お父様、どうか処刑はおやめくださいませ……！ みな本当は無実なのです。このままでは……」

二の言を継ぐ前に、ローゼンタール男爵は顔を変えた。その羊の

顔は怒りで赤く、エーファに向けた優しい顔とは全く異なるものであった。

「貴様……貴様までもが……ッ！」

「お父様、どうか、どうか……！」

エーファが懇願する横で、男爵は玉座に座りながら握り拳を作っていた。男爵の口は閉開を繰り返し、その厚ぼったい目は、ただ、一人の老騎士を睨みつけている。

老騎士の顔は、狐の顔をしていた。しかし、彼の顔に、狐特有のずる賢さは見られない。むしろ潔さを感じさせるような、落ち着いた雰囲気がある。

「しかしながら、家の為なのです……。ローゼンタール男爵、楽に死ぬぬことは、重々存じております。故に、一つだけでも、申し上げたい」

おじさま、駄目ッ！

立ちすくむエーファは老騎士に向かって、そう叫ぼうとした。だが、口が思うように開かない。老騎士は一瞬、瞬きをして、それからゆっくりと口を開き始める。

「家臣の大きな過ちが、貴方を怒りに蝕ばませ、疑心暗鬼に陥らせてしまった。だが男爵、あなたは」

絶望が、エーファの心を蝕んでゆく。何もかもが遠くなってゆく。男爵が激怒の声をあげた筈だが、エーファの耳はもう、なにも聞こえなくなっていた。手を伸ばせば、老騎士はもういない。衛兵も、男爵も、老騎士も。

誰もいない暗闇の玉室で、エーファは静かに、涙を流し続けた。後悔の波ばかりが、エーファの心を打つ。

また自分は、何も出来ずじまい、と。

……様。……ファ様、お嬢様。

耳元に聞こえる女声に、エーファは、心に絶望を抱きながら、ゆっくりと瞼を開いた。目の前には、彼女の忠臣であるアデーレが、

同じ袋の城の中でエーファに膝枕をしながら、悪夢から目覚めたエーファの顔を見つめていた。

「お嬢様、どうかなされたのですか？」

「……夢を見ていただけです」

何でもないように、エーファは呟くように返答した。口角をあげて、アデーレに心配ない、と笑顔を見せる。

「ただの夢。どうか、気にしないで下さい」

そう言いながら、エーファは自分の目を拭った。泣いていたらしい。大粒の涙が、手を濡らす。

「……お手を握らせて頂いてもよろしいでしょうか？」

にこり、と微笑みを浮かべて、アデーレは無邪気に問いかけた。

エーファは、こくり、と頷く。涙に濡れた右手を、アデーレはそっと握りしめた。

「こうすれば、不安も無くなります。そうでしょうか？ お嬢様」

何も聞かずに、アデーレは言った。

アデーレとエーファは、仲の良い主従であった。エーファが十歳になったところからだろうか。騎士となって早三年、中堅騎士となっていたのアデーレは、エーファのお付き騎士となっていた。

アデーレの家である、ロートシュヴァート家は、ローゼンタール家に古くから仕える騎士の家系である。故に、アデーレもまた信頼されていたのだ。

実際、彼女はエーファに今まででもよく仕えていた。エーファが病気をしたり、悪夢にうなされていると、ちょうど今のように、いつも彼女が手を握ってくれたのだった。

「すみません……」

エーファがつぶやいた。不意に、エーファの中で、何か熱いものがこみ上げてくる。アデーレはエーファの白い髪を撫でながら、いいですよ、と小さく言った。

少女の心は、ふと軽くなる。エーファは大きな声を上げながら、アデーレの膝元で泣き崩れたのだった。

鷹のように獰猛な目つきをした、鋭い目が、馬車の方を一瞥する。馬車の中の泣き声は、僅かな音量ながらも、外にも聞こえていたのだった。

「ふん。あまり大きな声を出さないでもらいてえな」

「まあまあ、そう言わずに。お嬢様も、不安が溜まっていたのです。どうかご理解下さい」

「珍しく盗賊が来なかつたつてのに、これじゃあ奴らに”ここですよ”って教えてるもんじゃねえか」

イザークと、アデーレの兄であるレオンハルトは、林の中に広がる湖の畔で、馬に水を飲ませ、自分も巨大な水筒にその清流をため込んでいた。

エーファが寝ている間に、もう時間はすっかり過ぎてしまっていた。空は赤く染まり始めていて、目的の町は彼らのすぐ目の前にあった。立派な城壁で囲われた、ある程度大きな町である。リットガルトと言っらしい。

イザークはそこで小麦を売って、そのお金でまた食料や道具を買い込む予定でいた。ローゼンタール令嬢の護衛任務を負って一週間になるが、買い貯めていた諸々の食料は尽きかけていたし、あると便利な道具、特に衣服などが欲しかった。特に、エーファの白い髪は目立ちすぎる。早急に、頭に被るものを着せておきたい。

「それに……」

イザークは呟いた。

新教徒（プロテスタント派）のギュスターヴ王率いるスヴィディナ王国は、順調に勝ち進んでいるし、スヴィディナ王国の小使いと化したユング侯国も、このところ負け知らずである。今後は道を選んで、迅速で行かなければ、易々と敵の手に捕まってしまうだろう。「聞きしによるとリットガルトは」

イザークの思案を遮るように、不意にレオンハルトが言葉を発した。イザークは一瞬レオンハルトに目をやったが、すぐに水筒に視線を戻す。

「どうやら、新教徒（プロテスタント派）のユング候派と、旧教徒（カテリエツタ派）のローゼンタール男爵派……つまりはシャウエスト候派ですが、どちらに帰属するかで町が二手に分かれているそうです。」

そうか、と言って、イザークはいくつもある水筒への水補給を終えると、今度は水仕事をこなし始めた。と言っても、するのは軽い洗濯ぐらいであるが。

「まあ、そのうちユング侯爵が手を打ってくるだろうが……危険だな」

「そうですね。早めに支度を終えて、何事もないように町を出るのが上策です。エーファ様の存在が明るみになると、非常に危うい」

レオンハルトも、水筒への補給を終えたようである。手持ちぶさたになった彼は、イザークに手伝いを申し込んだが、むべなく断られた。

「シャウエスト候も、エーファをこんなところで拾おうとするのは難しいだろうから……。それに、ユング候も、すぐに兵を派遣してくるだろう？ 二手に分かれているとなると」

「その通りです。先ほども言ったとおり、早めに支度をして、早く町を出るのが、一番の上策です」

レオンハルトはそう言って、自分も水筒への補給を終えると、リットガルトの城壁を一瞥した。古びた赤煉瓦の外壁は、真つ赤な夕日に照りつけて、血のような深紅色を醸し出している。ふとレオンハルトが気がつくのと、イザークは洗濯物も片づけて、もう馬車の方へと戻ろうとしていた。

「それで決まりだな。次のことは明日考えよう」

「では、行きましようか」

夕日はもうすぐ、しずみ始めるだろう。朱色の輝きは彩度を増し

て、イザークたちは思わず目を潜めた。

レオンハルトは身を縮め、狭い荷馬車の中へと乗り込む。イザークはまるで別人のような顔に、あの人当たりのよい行商人の顔に戻って、荷馬車の御者席に乗った。

「やアッ！」

手綱が打たれる。ブルル、と馬が鼻息を漏らし、荷馬車は、きしきしと音を立てる。荷馬車の馬は、ゆっくりと、その歩を進めて行く。

リットガルトの混乱(1)

僕だって、やれる。

その青年は、深く深呼吸をしながら、そう自分に言い聞かせた。目の前には、ふくよかな体格をした男　リットガルト一の有力商人、ゲオルグ・ゴールドシュタイン。

青年は、彼の丸っこい背中を睨み見ながら、懐にあるナイフを、ぎゅう、と握りしめた。

背中に一突き。そうすれば、この町のユング候派は総崩れ。旧教徒派であるシャウエスト侯派の人々が　その青年の父親が、町の最有力の商人として復権出来る。

そうだ、僕はやれるんだ。

「やれる、やれる、やれるやれる……ッ！」

その青年は、自分だけに聞こえるよう、小さく呟きながらナイフを取り出した。一、二歩と歩みを進めて、ゲオルグの背中へと近づき

「わアッ！」

強い衝撃が青年の身体を襲う。青年は何とかナイフを握ったまま、石畳に覆われた朝市に身体を打ち付けた。

青年は無我夢中である。何が起きたかも判らないまま、急いで立ち上がり、ゲオルグを探す。だがその前に、青年は一人の女に腕を掴まれた。

「貴様ッ、何をしていた！」

赤毛で、顔にそばかすがついた女である。だが、警備の人間ではないらしい。

青年は、そのひよる長い腕を強く躍らせて、女の腕から逃れようとしたが、その女の力は、存外に強かった。歯ぎしりして、体重をかけても逃れられない。青年の額には、大粒の汗が噴き出している。そして青年は、とうとうナイフを落とした。それに気を取られて

「わッ！」

石畳の道路に、青年の頭がしたたかに打ち付けられた。青年は激痛に悶えながら、やがてやってきた警備の人間に、御用となったのだった。

リットガルトの混乱(2)

全く、余計なことをしてくれたものだ。

イザークは、行商人カールとして、人当たりの良さそうな柔らかい笑顔を浮かべながら、内心ではそう思っていたのだった。

彼の目の前には、リットガルトのユング候派商人、ゲオルク。彼はふくよかな身体を椅子に乗せながら、やや興奮した声を上げた。

「いやあ、重ね重ね、感謝致しますぞ、マリア様！ 貴方様がいなければ、私は今頃……」

「いえ、あれを見逃しては護衛の名折れです。お褒めにあずかるよくなことでは御座いません」

「いやはや、ただの護衛のお方じゃありませんな。全く謙虚な、騎士のようなお方だ！」

ゲオルクがその謙虚さに眼を丸める。

だが、”騎士のような”という下りを聞いたアデーレは、寧ろもぞもぞと僅かに居心地悪そうに身体を動かした。イザークも、自分が笑顔をひきつらせていたことに気付いて、咳払いしながら笑顔を作りなおしたのだった。

ゲオルクは、それには気付かなかったようである。

「下手人　つまり、あの青年は」

と、真面目な、だが人の良さそうな顔を二人に向けながら、

「町の地下にある牢屋にいるでしょうから、ご安心ください。恐らく、もう、リットガルトの治安を悪くするような人間は出ないですよ」

もう、と言う言葉が、妙にイザークの耳についた。イザークがゲオルクの顔を見返すと、ゲオルクはにこりと、商人らしい無機質な笑顔を浮かべた。

「つきましては」

ゲオルクは、今度はアデーレの方を見て、

「どうでしょう、命を救っていたただいたお礼と言っては何ですが、我が家に泊まっていたって……？」

そう言われることは、イザークも事前に気づいていた。力を持つ貴族や商人は、自分の家に旅人をやたらと泊めたがるのである。

故に、彼は前もって準備していた言葉を使ったのだった。

「いえいえ、宿は既に取っていますし、ゲオルク様を煩わせる訳にも行きませんよ」

「どうかご心配なさらず。我が家は広いですし、空き部屋も四五六部屋は余っております。使用人も十二分にありますし……」

だが無論、イザークは粘る。

「いえ、実は病人を連れておりました……。何しろ難病で、如何なる医者でも手の施しようのない病を患っております」

嘘ではない。病人とは、白髪赤眼の　つまりアルビノである、エーファ・ローゼンタールのことである。伝染病ではないものの、彼女の病気は、確かに治しようがなかった。

「ふむ……」

「何かあったら、と思うと申し訳ないですから」

アデーレを、なにも言うなよ、という目線で刺しながら、イザークは揺らぐゲオルクに追撃を加えた。

ゲオルクは、沈黙である。じっと、節の太い手を組みながら、イザークの眼を見つめていた。

イザークは笑顔こそはやめなかったものの、その額にはわずかな冷や汗が走っていた。ゲオルクの眼には、油断ならないものが光っていた。

やがて、そのふくよかな有力商人は、ゆっくりと息を吸った。

「ここでもてなさなければ、マリア様ではございませんが、商人の名折れです。何かほかに問題がございましたら、私どもも無理強いは出来ませんが……」

「……分かりました」

ハアッ！　とうとう諦めたイザークは心の中で鋭いため息をはき

ながら、そう答えたのだった。これ以上拒否したら、逆に怪しまれるかもしれない。

「それでは、お言葉に甘えさせていただきます」

イザークはそういうと、頭を下げた。ついでアデーレも、彼を見ると急いで頭を下げた。

ゲオルクもまた、隙のない笑顔のまま、彼らと同じように会釈をしたのだった。イザークは彼のその笑顔を見ながら、何となく嫌な不安を覚えずにはいられなかった。

リットガルトの混乱(3)

イザークの独断に、アデーレは怒り狂っていた。

何しろ、ユング候を支持する、ゲオルクの家泊まるというのは、確かに無謀な決断である。宿へと戻る帰路で、彼女はイザークを睨みつけながら、口を開いた。

「無謀だ！ エーフ……」

エーフア様、と言おうとしたアデーレを、イザークが目で制す。

女騎士は舌打ちをした。そして、声を潜めながら、

「つまり、ローザ様の存在を隠しながら、ゲオルクの家泊するだど？ 無謀だっ」

無論、イザークも無謀なことは判っている。だが成り行き上、それ以外にどうしようもないのだ。

「断れば良かったではないか？ 所詮リットガルトも一日宿泊するだけ。怪しまれても、すぐに街を出て行けば良い」

「うるせえな。そこまで考えつかなくったんだよ」

イザークは歩きながら、煩わしげに言葉を放つ。ついで、彼は大口開けて息を吸って、

「第一てめエが騎士道を重んじて行動さえしなけりや、余計なことを考えずにこの街を出られていたんだぞ」

不意に、レイピアのような鋭い眼光が女騎士の顔に向けられて、彼女の顔に僅かな怯みの色が見える。

「違うかッ!？」

口角泡を飛ばしながら、彼は元々積もっていた苛立ちをひと思いにぶつけた。アデーレは彼の言葉に唇を結び、顔を俯かせながら、ぼつり、ぼつりと、小さく詫び入りの言葉を述べる。

「……それは、確かに申し訳なかった。旅の本来の目的を忘れていた」

「ほら見ろ！ はッ!」

鼻息荒く、目はぎろりとアデーレの横顔に向けられている。彼は馬鹿にするような声音で、言葉を吐き放った。

「てめえが全ての元凶なんだ」
そして、

「dann Halt die Klappe, Scheiss
er!（だから黙つとけ、クソアマガ!）」

アデーレは、一瞬イザークの言葉を疑うように、目を丸めた。scheisserとは、人を蔑んだ言葉である。だが、当然、友人や仲間に使う言葉ではない。仇敵、或いは強い憎悪の対象に向けて使う言葉である。

「……信じられない」

無表情になった彼女は、その一言だけを呟くと、逃げ去るように石畳の上を走っていった。だがイザークは気にせず、強く鼻を鳴らすだけである。

誰かが、二人を見ていたらしい。不意に、イザークの耳に野次が飛んで来た。

「痴話喧嘩かい!？」

商人の皮を被ったその傭兵は、一瞬怒りに駆られ、腰にささった短剣に手をかけていたが、やがて馬鹿らしい、と小さく呟く。そして彼は、女騎士を追うように、宿の帰路を行くのだった。

リットガルトの混乱(4)

ベッドが一つあるだけの、宿の小さな部屋に、アデーレはいなかった。まだ帰ってきていないらしい。イザークは、ふん、と鼻を鳴らしながら、古びて朽ちかけた木のドアを閉めた。ドアを開けたレオンハルトは、いつでも取り出せるように短剣に手を添えながら、イザークを笑顔で迎えた。

「お帰りなさい。アデーレと一緒にではなかったのですか？」

「ああ」

燦々とした太陽の光は、窓の手前に設けられたカーテンによって遮られている。そしてカーテンが開けられていけば光が当たったであろうベッドの上には、一人の少女が座っていた。

「お帰りなさい」

上品な言葉使いで、エーファ・ローゼンタールは、イザークにそう言ったのだった。

イザークはどきり、と胸が鳴らした。目が赤く、どこか人ならざる印象を持った、銀髪の少女である。イザークは、彼女の赤目に慣れていない。故に、彼はエーファを見る度に、僅かに怯むのである。彼は、自分が怯んだことを隠すように、軽く咳払いをしてから、荷物袋をベッドの上、エーファの背後周りに、ぞんざいに投げやった。それから彼は、

「二人とも、ちよいと良いか」

「何です？」

レオンハルトが問う。エーファも、背後のイザークにその小顔を向けた。

「ちよつとした……つまり、問題が起きた。ゲオルク、と言って判るか？」

「はい」

意外なことにも、返事を返したのはエーファだった。イザークは

面くらった。エーファは息を継いで、

「父が常々言っておりました。リットガルトのゲオルクと言う商人は、狡猾で鼻持ちならない男だ、と」

「へえ。……お前の親父は　つまり、ローゼンタール男爵は、他に何か言っていたか？」

レオンハルトの視線が気になって、イザークは何となく言い換えた。エーファは、ぶら下げていた足をベッドに載せ、イザークの方に向き直ると、考え込むようにして暫く沈黙した後、

「……そうですね。ゲオルク氏に関しては覚えてないですが、氏の商売敵であるヨーゼフ氏に関してなら、覚えて居ます」

「ヨーゼフ？」

レオンハルトが、”ああ、そういえば”と声を漏らした。その反応を見るに、どうやら、無名の商人ではないらしい。

「誰なんだ？」

「リットガルトの有力商人です。少なくとも戦争が始まる前には、ローゼンタール城にも幾度か書簡や交易品を頂きましたし、吟遊詩人も呼んでいただきました」

「その代わり？」

イザークが言ったが、エーファは意味を理解出来なかったらしい。小首を傾げて、

「と、言いますと？」

イザークは一瞬苛立ちを目に浮かべたが、それを抑えるとすぐに口を開けた。

「その代わりとして、何か代償があったらう。金、女だとか……」

「わたくしは存じませんが……」

エーファは、ちらとレオンハルトを見た。レオンハルトも首を左右に振る。誰も知らないらしい。

「……これは憶測の話ですが、お金を援助していたのは、想像に難くないです。他には、ゲオルク氏の元に密偵を送らせて、その情報をヨーゼフ氏に漏らしたり、或いは交易路の確保、税免除でしょう」

か。ローゼンタール城とリットガルトは近いですから、ローゼンタール領を通ることもあったでしょう」

「ふむ」

イザークは、エーファの頭の周り具合に目を丸めた。普通、女で勉強をするものはまず居ない。というのも、特に修学を必要とする聖職者には、女はまずなれない。また貴族であつても、女性が家長を務めるという例は、男性のそれにくらべ、極端に少なかった。家長でもないのに勉強をする者は、なかなかいないものである。

「代償がなかった、ということとは？」

と、レオンハルト。だがエーファは、

「相手が商人である以上、考えられませんか。普通なら、何かを求めらるものでしょう。安全保障、税免除などを。利益を考えずに貢ぐなど、普通なら考えられません」

と、明確に否定した。

「それで、何の話でしたっけ」

レオンハルトが聞く。話が脱線していたのに気付いて、イザークはうん、と頷いた。

「そのゲオルクの家泊まることになった。その様子だと、ゲオルクがユング候派であることはもう知っているだろう」

イザークはにべもなく言つて、ベッドの上に放つて置いた荷物袋の中をこそごとと漁る。レオンハルトの視線が、鋭くイザークの顔を刺した。

「どういうことですか？」

「アデーレが、通り魔からゲオルクを救つたんだ。それで、ゲオルクに持て成されることになった」

イザークは淡々と返答する。目的とするものは見つかったようで、彼は袋口から腕を抜いた。手には、フードのような帽子が掴まれていた。

「断ることは？」

「駄目だった。商人だけあつて、ゲオルクも押しが強い。断りすぎ

ても、怪しまれるかもしれないなかつたんだ」

「……今言つても仕方がないことですが……どうせリットガルトに滞在するのも一日。怪しまれても、断り続けた方が良かったでしょう」

アデーレと同じことを言っている。流石に兄妹である。イザークは帽子をじつとしていているエーファにかぶせ、きつく紐を縛つて髪が見えないようにしながら、レオンハルトの顔を齒がみしながら見た。「目はどうするのですか？」

じつと黙っていたエーファが口を開く。ああ、とイザークは返事を返して、もう一度荷物袋に手を入れた。

その時、ドアをノックする音が聞こえた。レオンハルトが短剣に手を添えながら、ドアに近づいた。

「私です。マリア・シュミット。鍛冶屋の娘のシュミットですよ」
レオンハルトは手をドアにかけて開ける。アデーレである。彼女が小部屋に入ると、部屋の中はとうとう窮屈な空気が漂い始めていた。

アデーレはイザークのことは無視しながら、

「よろしいでしょうか？」

と、エーファに問うた。ベッドの上に、つまり、エーファの横に座つても良いか、という意味である。

「ええ、勿論です」

エーファは笑顔を浮かべながら、アデーレの頬に唇を寄せて、軽い挨拶をした。チュツ、と一回、音上がる。先ほどまでの大人びた様子はどこへやら。その赤目と銀髪さえ無ければ、どこか田舎の子供と言つても差し支えないかもしれない。

「何故イザークと行動しなかつたのですか？」

ところが、その二人の親しげな様子を気にもせず、レオンハルトがやや厳しい声音で二人の中に割り行った。アデーレは、レオンハルトにむき直す。そして唇を一度、真一文字に結ぶと、息を吸つて、口を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8660q/>

DragoonMusket第一部“少女に流れる血の証し”

2011年3月20日01時07分発行